

一、機械とは何か

産業革命とは何か

第四講につづいて「独自の資本主義的生産様式」をもたらす「相対的剰余価値の生産」をみていきましょう。個々の資本家は、労働日の延長の生理的制限に加え、「標準労働日」の制定による絶対的剰余価値生産の「制限」のもとで、相対的剰余価値の生産という「当為」を求めて生産力の発展を競い合い、歴史的にみると、協業、マニユファクチュア、機械制大工業へと全体として生産力を発展させてきたことを学びました。

第四篇最後の第三章「機械設備と大工業」は第一〇節まである大変長い章であり、機械制大工業が全面的に分析されることをつうじて、総括的に資本主義とは何かを明らかにされます。

マニユファクチュアから機械制大工業への移行は、労働手段が道具から機械へと移行することによって実現されます。一七三五年、ジョン・ワイアトによる紡績機械の発明によって産業革命のろしが上げられました。この機械は、数個のローラーを組み合わせることによって、「指を使わないで紡ぐため」(③六四四ページ／三九二ページ)の作業機であり、人間はこの作業機を動かす原動力の役割を果たすだけでした(実際には、人間の代わりにロバが原動力になったようです)。それまで綿から糸を引いたり、撚りあわせたりして糸を紡ぐ作業は、人間の手によっておこなわれていたのに、ワイアトの紡績機械では、この作業を人間の代わりに機械がするようになつたのです。

「多くの手工業道具にあつては、単なる原動力としての人間と、本来の意味での操縦者である労働者としての人間とのあいだの区別は、感性的に区別されるものになつていく。たとえば、紡車にあつては、足は原動力としてのみ働き、他方、紡錘を操縦して糸を引いたり撚ったりする手は、本来の意味での紡績作業を行なう。まさに手工業用具のこのあとの部分をこそ、産業革命はまず第一にとらえるのであつて、原動力の純粋に機械的な役割については、機械を自分の目で監視し機械の誤りを自分の手で正す新たな労働とともに、さしあたりはまだ人間にまかされている」(③六四九ページ／三九五ページ)。

ここにいる「手工業用具のこの後の部分」というのは、道具機(または作業機)のことを意味しています。マルクスは、発達した機械には、原動機、伝動機構、道具機の「三つの本質的に異なる部分」(③六四六ページ／三九三ページ)があることを明らかにしたうえで、「道具機こそが、一八世紀産業革命の出発点をなすものである。道具機は、手工業経営またはマニユファクチュア経営が機械経営に移行するたびに、いまなお毎日あらためて出発点となつていく」(③六四七ページ／同)としています。

この指摘は、重要な意味をもっています。というのも、この事実は産業革命の本質とは何か、なぜ産業革命が始まったのか、を説明するものとなつていくからです。

本質と現象というのは、弁証法のもつとも重要なカテゴリーの一つであり、これからは様々なバージョンで、度々登場してくるようになります。ヘーゲルは、「本質は過ぎ去つた有」であり、「なお注意すべきことは、過ぎ去つたものはそのために全く否定されているのではなく、揚棄されているにすぎず、したがって同時に保存されてもいるのだ、ということである」(『小論理学』一一二節補遺)と語っています。

すべての事物は、生まれただけの姿においては、その事物の本質がそのままあらわれていますが、時間的経過により変化・発展し、様々な現象形態を身にまとうことによつて、本質は次第にみえにくくなっていきます。

ですから、その事物の本質を知ろうと思えば、その事物の発生時という過去を知ることが必要であり、過去をみれば本質が分かるという意味で、「本質は過ぎ去った有^レ」なのです。しかし事物のその後の変化・発展のなかでも、その事物の本質そのものが失われるわけではありませんから、本質は「全く否定されているのではなく」「同時に保存されてもいる」といつているのです。

資本主義的生産様式の一つであるマニユファクチュアは、産業革命によって、同じ資本主義的生産様式としての機械制大工業に移行することになりました。

これまでもお話ししてきたように、資本主義的生産様式の推進的動機は、剰余価値の生産にあります。そして、個別資本は絶対的剰余価値生産の制限を乗り越えるために「特別剰余価値」（相対的剰余価値）の獲得をめざして、生産力の発展に命を懸けるのです。

この生産力の発展をめざす衝動が産業革命を生みだしたのであり、したがって産業革命は、まず直接生産力の発展につながる道具機の改良から始まり、ついで改良された道具機の生産力を支えるにたる、原動力の発明へと前進していったのです。

したがって、産業革命の本質は、生産力の発展を目的とした機械の発明により、より大きな剰余価値を生産することにあるということができます。

マルクスは、第三章「機械設備と大工業」の冒頭に、「資本主義的に使用される機械設備の目的」は、「労働の生産力の他のどの発展とも同じように」「剰余価値の生産のための手段である」（③六四三ページ／三九一ページ）と、その趣旨を明確にのべています。

機械とは何か

このように産業革命の本質をとらえることは、マルクスが提起した「まず研究しなければならないことは、なによりによって労働手段は道具から機械に転化されるのか、または、なによりによって機械は手工業用具と区別されるのか」（同）との問いに答えることにもなるのです。当時この問題については、「激しい論争」（全集⑩二五七ページ）があり、イギリスの機械学者は、「道具を簡単な機械と呼び、機械を複雑な道具」（同）とよんでいたようですが、こういう区別では、道具と機械の本質的区別をとらえたものにはなっていないと断言します。

まず、機械を代表する「道具機」と、マニユファクチュアで使用される「道具」との同一と区別の問題を検討してみましよう。

「道具機は、適当な運動が伝えられると、自分の道具で、以前に労働者が類似の道具で行なったのと同じ作業を行なう一機構である」（③六四七ページ／三九四ページ）。つまり、労働者が道具を使って指で糸を紡ぐ場合も、道具機であるワイアト紡績機が糸を紡ぐ場合も、具体的有用的労働としては、同じ「糸を紡ぐ労働」という「質」をもつものであって、それらを区別することはできません。

では、どこが違うのでしょうか。まず第一に、いうまでもなく、紡ぎ出す糸の「量」が違うのです。機械を道具から区別するものは、労働の生産力の差、生産する商品の量の差なのです。第二にこの生産力の差はどこから生じているのでしょうか。それは、道具の場合、その生産力は人間の力に依存しているのに対し、機械の場合、人間の力による制約から解放されているからです。いわばこれは道具と機械の質的相違ということができるといえるでしょう。

マニユファクチュアの場合、熟練労働者は、その熟練した技能と手なれた道具を使用して、人間力の限界まで

生産力を高めますが、それでも労働者が自分の手足の延長としての道具に頼っている限り、その生産力に一定の限界があることは否定できません。

しかし、機械はこの限界をやすやすとのりこえ、「どんなに熟練した労働者の手の積み重ねられた経験も与えることのできないほどの容易さ、正確さ、速さで生産する」(③六六六ページ/四〇六ページ)のです。

いわば機械は、その生産力において、量的にも道具から区別されると同時に、質的にも人間力から解放されることによって区別されているのです。すなわち、道具とは人間がその手足の延長として使用する、人間に従属し、かつ人間力の限界内で生産力を発揮する労働手段であるのに対し、機械とは人間から相対的に自立し、かつ人間力の限界から解放された生産力をもつ労働手段である、ということができないではありませんか。

これも高村流の定義であって、マルクス自身がこのようにいつているわけではないでしょうか。しかし、マルクスも、「人間が同時に使用できる労働用具の総数は、人間の自然的生産用具、すなわち彼自身の肉体的器官の総数によって制限されている」(③六四八ページ/三九四ページ)とか、「いまや原動機も、一つの自立した、人間力の制限から完全に解放された形態をとるようになった」(③六五五ページ/三九八ページ)と述べていることなどから推察すると、まんざら不正確な定義でもないように思われます。したがって、機械の本質は、生産力の発展に直接結びつく道具機にあり、産業革命もまた道具機の発明から始まったのです。

ここには、「質から量への移行」という量と質の弁証法があります。つまり、道具から機械へという生産手段の質的転換が、生産力という量的飛躍を生みだしたのです。先に貨幣から資本への移行のところ、**「量から質への移行」**をみてきましたが、ここではその逆の姿がみられるのです。このように、量と質とは、相対立する概念でありながら、相互に浸透し、移行しあうことを**「対立物の相互浸透」**とか**「対立物の相互移行」**とよんでいきます。

道具機の発展が原動機の発展を、原動機の発展が道具機の発展をと、相互に影響しあって機械は発展し、その生産力量を高めていきます。それとともに、両者を結合する伝動機構も発展して、**「マニユファクチュアにおける非連続の分業は、機械における連続した分業となり、ついには、「それ自体として一つの大きな自動装置を形成する」**(③六五九ページ/四〇二ページ)**」**ことになります。

こうして、原動機、伝導機構、道具機という**「三つの本質的に異なる部分」**は、有機的に結合し、巨大な体系化された機械設備となり、ここに巨大な生産力を誇る機械制大工業が登場することになるのです。いわば個々の機械から、諸機械を結合し、体系化された、機械設備への移行です。

「もつぱら伝動機械設備を媒介として一つの中央的自動装置からその運動を受け取る諸作業機の編成された体系として、機械経営はそのもつとも発展した姿態をもつ。ここでは、個々の機械の代わりに一つの機械的怪物が現われるが、そのからだは工場建物全体に広がり、またその悪魔的な力は、……無数のそれ自身の労働器官の熱狂的な旋回舞踊となって爆発するのである」(③六六一ページ/四〇二ページ)。

二、機械制大工業は「独自の資本主義的生産様式」

労働の実質的包摂

機械制大工業の発展は、生産力を爆発的に発展させるとい**「当為」**を実現するのですが、単にそこにとどま

るのではなく、生産と労働の体制を根本的に変革し、新たな矛盾をもたらす「独自の資本主義的生産様式」を生みだします。

いわば機械制大工業こそ、第四講でお話しした「独自の資本主義的生産様式」をなすものなのです。

「相対的剰余価値の生産は、労働の技術的諸過程および社会的諸編成を徹底的に変革する。したがって、相対的剰余価値の生産は、一つの独自の資本主義的生産様式を想定するのであって、この生産様式は、その方法、手段、および条件そのものとともに、最初は、資本のもとへの労働の形式的包摂を基礎として、自然発生的に成立し、発展させられる。形式的包摂に代わって、資本のもとへの労働の実質的包摂が現われる」(③八七三、八七四ページ/五三三ページ)。

ここにいう「相対的剰余価値の生産」は、「機械制大工業による相対的剰余価値の生産」と読みかえることができるでしょう。

機械制大工業のもとで「工場全運動が、労働者からでなく、機械から出発する」(③七二七ページ/四四四ページ)ことにより、資本は労働過程を完全に征服します。いわば「工場全体への、すなわち資本家への、労働者のどうしようもない従属が、完成される」(③七三〇ページ/四四五ページ)のです。

同じ資本主義的生産様式のもとでも、協業やマニュアルチュアの段階では、労働者は、まだ資本家の「指揮監督、および調整」(③五七六ページ/三五〇ページ)で労働するという「労働の形式的包摂」にとどまっていたのですが、機械制大工業のもとで、「資本家への、労働者のどうしようもない従属が、完成される」ことにより、「労働の形式的包摂」が「労働の実質的包摂」へと転化するのです。その意味で機械制大工業は、「独自の資本主義的生産様式」とよばれているのです。

工場とは何か

続いてマルクスは、「独自の資本主義的生産様式」としての機械制大工業を、第四節で「工場」という完成態において、その特徴をとらえようとしています。

まず、「近代的工場制度を特徴づけ」るものは、「自動装置そのものが主体であって、労働者はただ意識のある諸器官として自動装置の意識のない諸器官に付属させられているだけで、後者とともに中心的動力に従属させられている」(③七二五ページ/四四二ページ)ことが確認されます。

重要なことは、この自動装置がほかならぬ資本として存在していることであり、「自動装置は資本家のうちに意識と意志とをもっている」(③六九七ページ/四二五ページ)ことです。

したがって、資本家は、自己の絶対的致富衝動を機械設備に託し、機械設備を媒介として、労働者への専制支配と搾取強化を敢行していくことになるのです。

「マニュアルチュアと手工業では労働者が道具を自分に奉仕させるが、工場では労働者が機械に奉仕する」(③七三〇ページ/四四五ページ)。

手工業的な道具の場合、道具は労働者あつての道具であり、労働者に従属した労働手段でしかなかったのですが、機械は、相対的に労働者から自立した労働手段であり、しかもそれが巨大設備化すればするほど、また自動化すればするほど、個々の労働者から自立していくと同時に、労働者への支配を強化することになっていくのです。

こうして、労働手段としての機械設備は、たんに道具に比べて生産力を飛躍的に発展させるといふ量的変化を

もたらずにとどまらず、マニユファクチュアにおける労働者に従属した手段から、労働者を支配する手段へと、弁証法的な転化（対立物の相互移行）を実現させたのです。

この弁証法的な転化は、工場全体を空想的社会主義者・フリーエのいう「緩和された徒刑場」（③七三七ページ／四五〇ページ）に変えてしまったのでした。

また、機械を媒介に、工場における専制君主としての地位を確立した資本家は、専制君主にふさわしい「工場法典」（③七三三ページ／四四七ページ）、つまり就業規則を制定して、「一つの兵營的規律」（③七三二ページ／同）をつくりだすのです。

マルクスは、皮肉たっぷり、この就業規則の一方的制定について「資本は、工場以外のところではブルジョアジーによりあれほど愛好される権力の分割もなく（モンテスキューのいう「三権分立」のこと——高村）、またそれ以上に愛好される代議制もなしに、自分の労働者にたいする自分の専制支配を、私法的に、かつ意のままに定式化している」（③七三三ページ／同）と書いています。

三、機械の労働者に及ぼす「一般的反作用」

機械の及ぼす五つの反作用

このように専制支配を確立した資本家は、機械と機械設備を利用して、労働者への支配と搾取を強化していきます。マルクスは、それを機械が労働者に及ぼす「一般的反作用」（③六八二ページ／四二六ページ）とよび、第

三節と第五節から第七節までにおいて、次の五つの形態において考察していきます。

第一は、婦人（女性）労働および児童労働の使用です。機械は、労働者から相対的に自立した労働手段ですから、人間力や熟練労働を必要としません。そこで「筋力のない労働者、または身体の発達の未成熟な、しかし手足の柔軟性の大きい」（同）女性や児童が、熟練労働者にとってかわる安い労働力として使用され、消耗されることとなります。

「機械設備は、労働者家族の全成員を労働市場に投げ込むことによって、夫の労働力の価値を彼の全家族が分担するようにする。それゆえ機械設備は、彼の労働力の価値を減少させる。……一家族が生活するためには、いまや四人が、資本のために、労働だけでなく剰余労働をも提供しなければならぬ」（③六八三、六八四ページ／四一七ページ）。

こうして労賃は、機械設備のもとで、労働力の価値以下へと引き下げられてしまうのです。

第二は、労働日の延長です。もともと機械は、労働の生産性を高める手段として開発されたものですから、「労働日をあらゆる自然的制限を超えて延長するもつとも強力な手段になる」（③六九六ページ／四二五ページ）。

労働日の延長が、絶対的剰余価値の生産につながることは、これまでみてきたところですが、実は、機械は、機械それ自体として労働日を無制限に延長しようとする独特の要因をもっているのです。

それが、「社会基準上（モラーリッシュ）の摩滅」（③六九九ページ／四二六ページ）です。ドイツ語の「モラーリッシュ」は、通常「道徳的な」と訳されています。しかし、機械の摩滅に、「道徳的」という人間の生き方に関わる訳をあてるのは適当でないので、「社会基準上の」と訳されています。

問題は、なぜマルクスが機械に「モラーリッシュ」を使ったのかにあります。これはあくまで推測にすぎませ

んが、マルクスがヘーゲル『法の哲学』の影響を受けたものではないかと考えています。ヘーゲルは、道徳とは「善をなすべし」という「当為の立場」（『法の哲学』一〇八節）だとしています。機械の価値は「こうあるべきだと社会がきめる摩滅」という意味で、マルクスは「モラーリツシュの摩滅」といったのではないのでしょうか。そのことは、「機械は労働日のあらゆる社会基準的（ジットリツへ）および自然的な諸制限をくつがえす」（③七〇五ページ／四三〇ページ）という箇所からも窺うことができます。この「ジットリツへ」も『法の哲学』で用いられる重要な概念であり、通常「倫理的な」と訳されます。ヘーゲルは倫理を、「真にあるべき社会共同体のルール」という意味で使用していますので、この箇所も「機械は、労働日の真にあるべき社会的ルールの制限をくつがえす」という意味で用いたものでしょう。

マルクスが機械論において、ヘーゲル『法の哲学』の鍵ともなる「道徳」と「倫理」の概念をもとに持ち出し、しかもそこにヘーゲルへの理解を必要とする謎めいた表現を採用したことは、マルクスらしい諧謔かいぎやくをもてあそんだものといつていいでしょう。

それはともかく、「社会基準上の摩滅」とは、「同じ構造の機械がより安く生産されるようになるか、より優れた機械が現われそれと競争するようになれば、その程度に応じて交換価値を失う」（③六九九ページ／四二六、四二七ページ）ことを意味しています。いわば、新製品の登場による旧製品の社会的価値の減少です。したがって、この摩滅を逃れるためにできるだけ短期間に機械を償却すること、つまり労働日のできるだけの延長が社会的要請となってくるのです。

「そこから、労働時間短縮のためのもつとも強力な手段が、労働者およびその家族の全生活時間を資本の価値増殖のための自由に処分される労働時間に転化するもつとも確実な手段に急変するという、経済学的逆説も生じ」の要請となってくるのです。

「そこら」(③七〇五ページ／四三〇ページ)。

資本家のもとで、機械の改良による生産力の発展は、決して労働時間の短縮にはつながらず、逆に労働時間の延長にさえつながるところに、「剰余価値の生産のための手段」としての機械使用の歴史的限界があるのです。

第三は、労働の強化です。第四講で労働の強化は、絶対的剰余価値と相対的剰余価値とを同時に生産する搾取強化の方法であるとお話ししてきましたが、機械は、労働者を支配する手段に転化することにより、二通りのやり方、つまり機械のスピードアップと労働者の担当する機械台数の増大というやり方で、「同じ時間内により多くの労働をしぼり出すための、客観的な、かつ系統的に充用される手段となる」（③七二二ページ／四三四ページ）のです。

こうした労働強化は労働者の生命力を短期間に消耗するのみならず、その精神をも疲弊させ、うつ病などの精神疾患を多発させていくことにもなるのです。

いわば、「責め苦の手段」としての「機械労働は神経系統を極度に疲れさせるが、他方では、それは筋肉の多面的な働きを抑制し、いっさいの自由な肉体的および精神的活動を奪い去」（③七三〇、七三二ページ／四四五、四四六ページ）つてしまいます。

第四に、労働者の生活と健康を破壊する職場環境が作り出されることです。「工場制度のなかではじめて温室的に成熟した社会的生産手段の節約は、資本の手のなかでは、同時に、労働中の労働者の生存諸条件、すなわち空間、空気、光の組織的強奪、また労働者の慰安設備については論外としても、生産過程での人命に危険な、または健康に有害な諸事情にたいする人的保護手段の組織的強奪となる」（③七三七ページ／四五〇ページ）。

第五に、マルクスは、第三節「労働者におよぼす機械経営の直接的影響」では簡単にしか取り上げてはいない

のですが、第五節以下でふれている機械が労働者を駆逐し、過剰人口を生みだすことをあげておきたいと思いません。

「機械設備の資本主義的充用は、一方では、労働日の無制限な延長の新しい強力な動機をつくり出し、……他方では、一部は、労働者階級のうち、以前には資本の手の届かなかった階層を編入することによって、一部は、機械に駆逐された労働者を遊離することによって、資本の法則の命令に従わざるをえない過剰人口を生み出す」(③七〇五ページ／四三〇ページ)。

こうして産業革命により、機械から駆逐されたマニユファクチュア労働者は、機械そのものを敵だとする「ラダイト運動」(機械打ちこわし運動)に出ることになるのです。

マルクスはラダイト運動を回顧して、「労働者が、機械設備をその資本主義的充用から区別し、それゆえ彼の攻撃を物質的生産手段そのものからその社会的利用形態に移すことを学ぶまでには、時間と経験が必要であった」(③七四一ページ／四五二ページ)とのべています。

また、こうした過剰人口の産出により、労働者が反抗すれば、いつでも資本家は、労働者を放逐し、過剰人口から労働力を補充することができることになり、機械は、労働者の反抗を抑圧する強力な手段となるのです。

「とはいえ機械設備は、つねに賃労働者を『過剰』にしようとする優勢な競争者として作用するだけではない。それは、資本によって、賃労働者に敵対的な能力能として、声高くかつ意図的に、宣言された取り扱われる。それは、資本の専制に反対する周期的な労働者の蜂起、ストライキなどを打倒するためのもつとも強力な武器となる」(③七五二ページ／四五九ページ)。

以上五つの搾取強化の影響を考察したうえで、マルクスは、機械の資本主義的使用について、次のようにまと

めをおこなっています。先に第四講で、労働手段の進歩・発展の歴史は、人類の進歩・発展の歴史に重なることを指摘してきました。しかし資本主義的生産様式のもとにあつては、機械の進歩・発展は、生産力の進歩・発展ではあつても、全体としてみると、決して労働者にとつての進歩・発展を意味するものではなく、進歩は同時に退歩となるのです。

「機械設備は、それ自体として見れば労働時間を短縮するが資本主義的に使用されると労働日を延長する、それ自体としては労働を軽減するが資本主義的に使用されるとその強度を高める、それ自体としては自然力にたいする人間の勝利であるが資本主義的に使用されると自然力によって人間を抑圧する、それ自体としては生産者の富を増加させるが資本主義的に使用されると生産者を貧困化させる」(③七六四ページ／四六五ページ)。

機械制大工業の弁証法

しかしマルクスは、ここでも、全体として機械の労働者に与える影響を退歩としてとらえるとしても、なお進歩の側面がないわけではないとして、この面にも目配りをするのを忘れていません。弁証法的なものの方の一つは、一つの事物には常に対立する二つの側面があることを忘れてはならないということであり、それが俗に、「ものには両面がある」とか「一面的なものを見ない」とか、「全面的なものを見る」などといわれているものです。マルクスは、機械のもたらす影響についても、この見地をたづねているのです。

その一つは、機械の発展は、技術学をはじめとする近代諸科学を生みだし、生産力を飛躍的に発展させると同時に、こうした近代諸科学の成果を身につけた、全面的に発達した個人を生み出すということです。いわば高度に経済的に発達した社会は、その社会を担うにふさわしい高い教育と教養を身につけた諸個人を生みだしていく

のです。

それは、マニユファクチュア時代の「部分労働者」とは決定的に異なるものです。「手工業的英知のこの『究極』」は、「靴匠は靴型以上に出るなかれ」（③八三九ページ／五一二ページ）というものでした。これに対し、機械制大工業は古い分業を止揚し、「一つの社会的な細部機能の単なる担い手にすぎない部分個人の代わりに、さまざまな社会的機能かわるがわる行なうような活動様式をもった、全体的に発達した個人をもつてくることを、死活の問題とする」（③八三八ページ／同）。

その二つは、女性労働、児童労働が、資本主義的生産に引き入れられることにより、家長制という古い家族制度を解体し、家族全員の個人の尊厳と対等・平等な権利を保障する新たな家族制度を登場させるということです。

「資本主義制度の内部における古い家族制度の解体が、どれほど恐ろしくかつ厭わしいものに見えようとも、大工業は、家事の領域のかなたにある社会的に組織された生産過程において、婦人、年少者、および児童に決定的な役割を割り当てることによって家族と男女両性関係とのより高度な形態のための新しい経済的基礎をつくり出す」（③八四二、八四三ページ／五一四ページ）。

その三つは、機械制大工業のところで述べているわけではないのですが、資本主義的生産様式は自由と民主主義を発展させる、という問題です。

そもそも資本主義の発展を生みだしたブルジョア民主主義革命は、アメリカ独立宣言やフランス人権宣言にみられるように、天賦の人権と自由・平等を掲げて歴史の舞台に登場しました。それは、直接的には、封建制の身的制約を打ち破り、所有権の自由、取引の自由、搾取の自由を実現することを目的としたものですが、自由

と民主主義一般を、基本的人権として宣言したことは、社会の進歩・発展に大きな意義をもっていました。

『資本論』は、商品交換をその出発点としていますが、その前提となっているのは、生産者が対等・平等な人格として、等価物を交換するというものでした。労働者と資本家も、「自由で法律上対等な人格」として、労働力の売買契約を結ぶのです。

そこで、マルクスは、「労働力の売買がその枠内で行なわれる流通または商品交換の局面は、実際、天賦人権の真の楽園であった。ここで支配しているのは、自由、平等、所有、およびベンサムだけである」（②三〇〇ページ／一八九ページ）と述べています。

ベンサムというのは、「最大多数の最大幸福」を唱えたイギリスの功利主義者です。マルクスは、人権と自由・平等という「真の楽園」において、過酷な労働者の搾取が行われていることを、ここで皮肉っぽく表現したのですが、資本主義的生産様式が、自由と民主主義を発展させたことの意義をけつして否定しているものではありません。

それは、マルクスの「五七く五八年草稿」において、「諸個人の普遍的な発展のうえにきずかれた、また諸個人の共同体的、社会的生産性を諸個人の社会的機能として服属させることとうえにきずかれた自由な個性（個性）は、第三の段階である。第二段階は第三段階の諸条件をつくり出す」（『草稿集』①一三八ページ）と述べていることからしても明らかです。ここにいる第三段階とは、社会主義・共産主義の社会をさしています。

こうしたことを受けて、マルクスは、『資本論』においても、資本主義社会は、「各個人の完全で自由な発展を基本原理とする、より高度な社会形態の唯一の現実的土台となりうる物質的生産諸条件を創造させる」（④一〇一六ページ／六一八ページ）と述べているのです。

しかしマルクスがこの資本主義的自由と民主主義の意義と限界とを、『資本論』において十分に展開しなかったことは心残りに思えます。

とはいえ、資本主義的生産様式が、生産力の発展、近代諸科学の発展と全体的に発達した個人、新たな家族制度などと併せて、自由と民主主義の発展をもたらしたとして、その歴史的役割を積極的に評価していることは、資本主義社会が未来社会に引き継ぐべき遺産を明らかにしたものであることができるでしょう。

その四つは、工場立法が一般化することの社会的意義です。マルクスは、工場立法の一般化は「資本の支配にたいする直接的な闘争」(③八六四ページ/五二六ページ)の一般化であると見え、次のように結論づけています。

「工場立法の一般化は、生産過程の物質的諸条件および社会的結合とともに、生産過程の資本主義的形態の諸矛盾と諸敵対とを、それゆえ同時に、新しい社会の形成要素と古い社会の変革契機とを成熟させる」(同)。

こうして機械制大工業は、資本家と労働者階級との間の階級闘争を成熟させ、「新しい社会」へと社会を発展させていく変革の契機になるのです。

機械制大工業の社会全体への影響

以上機械制大工業が労働者に及ぼす影響をみてきましたが、マルクスはさらに視野を広げて、社会全体にどのような影響をもたらすかについても考察しています。

その一つは、発達した資本主義は植民地と南北問題とを生みだす問題です。

「この経営様式は、ある弾力性を、すなわち突発的で飛躍的な拡大能力を獲得するのであって、この拡大能力

はただ原料と販売市場にかんしてのみ制限を受けるにすぎない。……機械生産物の安さおよび変革された運輸・通信制度は、外国の諸市場を征服するための武器である。外国市場の手工業的生産物を破滅させることによって、機械経営は、外国市場を強制的に自分の原料の生産地に転化させる。……機械経営の主要立地に照応する新しい国際的分業がつくり出され、それが、地球の一部を、工業を主とする生産地である他の部分のために、農業を主とする生産地に転化させる」(③七七九ページ/四七四、四七五ページ)。

発達した資本主義国が、政治的に植民地を支配し、外国市場にすると同時に、原料生産地に転化させることについては、マルクスの指摘するところですが、地球を工業地と農業地とに分割してしまうという箇所は、今日のみるとやや異論のあるところです。長年にわたって植民地として支配されてきた国々では、これまで農業と手工業的小生産により自立した一国経済を営んできたのに、植民地支配のもとで、モノカルチャアといわれる少品種の鉱産物や農産物などの生産を押しつけられ、その国の経済的自立性が失われたことが最大の問題だろうと思います。ですから、二〇世紀後半から旧植民地だった諸国は次々と独立をかちとつたにもかかわらず、経済的に自立することができず、グローバル資本主義の影響もあって発達した資本主義諸国との間の生産力の差、貧富の差は拡大するばかりとなり、いわゆる南北問題が深刻になっているのです。

その二つは、発達した資本主義国における景気循環の問題です。

「工場制度の巨大な飛躍的な拡張可能性と世界市場への工場制度の依存性とは、必然的に、熱病的な生産とそれに続く市場の過充をつくり出すが、この市場の収縮とともに麻痺が現われる。産業の生活は、中位の活気、繁栄、過剰生産、恐慌、停滞という諸時期の一系列に転化する」(③七八二ページ/四七六ページ)。

ここでは、まだ景気循環の詳しい経済的メカニズムの検討にまでは入っていません。その前提となる社会的総

資本の再生産の研究がなされていないからです。この景気循環と恐慌論は、第二部の主題となってくるのであって、ここではとりあえず、資本主義的生産様式の現象の一つとして、景気循環が指摘されるにとどまっています。

四、「絶対的および相対的剰余価値の生産」(第五篇)

絶対的剰余価値と相対的剰余価値の関係

以上、第三篇、第四篇をつうじて、資本の推進的動機、規定的目的が、より大きな剰余価値の獲得にあり、その剰余価値の生産には、絶対的剰余価値の生産と相対的剰余価値の生産という対立する二つの側面があることをみてきました。

第五篇「絶対的および相対的剰余価値の生産」では、この対立する二つの側面がどのような関係にあるのかを検討することをつうじて、資本主義的生産様式とは何か、言いかえれば資本主義とは何かを検討課題としています。いわば絶対的剰余価値と相対的剰余価値という対立物の統一の具体的形態を論じることをつうじて、資本主義とは何か、という資本主義の本質を明らかにしようというのです。

マルクスは第五篇の主題が、資本主義的生産様式とは何か、という「資本主義の本質」をとらえることにあることを明言してはいません。しかし、第一部の主題は全体として資本主義とは何かを明らかにすることであり、第二部はそれを前提として、資本主義をその運動の諸形態においてとらえることにあると思われまゝ。こう考えた場合、第一部の主題を展開する舞台は、第五篇以外にありません。というのも、第一篇から第四篇までは、資

本とは何かという「資本の本質」を説明する道具立ての説明そのものにとどまっていて、特殊かつ歴史的な生産様式としての資本主義そのものを全体として説明しようとする状況にはなっていませんし、また第六篇の「労賃」、第七篇「資本の蓄積過程」は、資本主義的生産様式を前提とし、その展開としてとらえられているからです。

第三篇で「絶対的剰余価値の生産」、第四篇で「相対的剰余価値の生産」を論じたうえで、第五篇「絶対的および相対的剰余価値の生産」を論じることは、一見すると重複しているように思われます。しかし、マルクスは、第五篇で二つの剰余価値生産の方法の関係を検討することをつうじて、「独自の資本主義的生産様式」とは何かを明らかにしたかったのではないのでしょうか。そしてこの「独自の資本主義的生産様式」こそ、資本主義的生産様式の本質、つまり、資本主義とは何かを示すものにほかならないのです。

相対的剰余価値の生産が「独自の資本主義的生産様式」を形づくる

まずマルクスは、絶対的剰余価値の生産は、「資本主義制度の一般的基礎をなし、また相対的剰余価値の生産の出発点をなしている」(③八七三ページ/五三二ページ)としたうえで、「相対的剰余価値の生産は労働の技術的諸過程および社会的諸編成を徹底的に変革する」(同/五三三ページ)といっています。

つまり、労働日の延長による絶対的剰余価値の生産は、初期の資本主義制度の「一般的基礎」となっていたものの、工場立法の一般化などによる「制限」により、資本主義は機械制大工業による相対的剰余価値の生産という「当為」に移行せざるをえなくなってくるのです。そして機械制大工業による相対的剰余価値の生産は、絶えざる技術革新と搾取の強化をつうじて生産力を際限なく発展させ、「労働の技術的諸過程および社会的諸編成を徹底的に変革」していくこととなります。

「機械の及ぼす五つの反作用」で「機械設備は、それ自体として見れば労働時間を短縮するが資本主義的に使用されると労働日を延長する、それ自体としては労働を軽減するが資本主義的に使用されるとその強度を高める」(③七六四ページ/四六五ページ)ことを学びました。その意味では機械制大工業という「相対的剰余価値の生産のための方法は、同時に絶対的剰余価値の生産のための方法でもある」(③八七四ページ/五三三ページ)ことになりました。

しかしマルクスは、「剰余価値の運動」(③八七五ページ/五三四ページ)、つまり資本の運動に注目すると「同一性のこの外観は消えうせ」(同)、「剰余価値率を一般に高めることが問題になる限り、絶対的剰余価値と相対的剰余価値との区別は感知されうるもの」となり、「次の二者択一を迫られる」(同)として、次のように述べています。

「労働の生産力および労働の標準的な強度が与えられているならば、剰余価値率は労働日の絶対的延長によってのみ高められる。他方、労働日の限界が与えられているならば、剰余価値率は、必要労働および剰余労働という労働日の構成部分の大きさの相対的変動によつてのみ高められ、この変動はまた、賃金が労働力の価値以下に低落しないとすれば、労働の生産性または強度における変動を前提している」(③八七五、八七六ページ/同)。

したがって労働日の延長のもつ生理的限界に加え、工場立法の一般化という「制限」のもとにあつて、資本は生産力を発展させることによる相対的剰余価値の増大を「当為」として、機械制大工業という「独自の資本主義的生産様式」を生みださざるをえなくなるのです。

マルクスは、「したがって相対的剰余価値の生産は、一つの独自の資本主義的生産様式を想定する」(③八七四ページ/五三三ページ)とのべ、機械制大工業のもとでの生産力の飛躍的發展と「資本のもとへの労働の実質的

包摂」(同)が資本主義的生産様式の本質をなすものととらえているのです。

そして「労働の実質的包摂」のもとでの、機械制大工業による生産力の発展は、たえない搾取の強化と機械と技術の革新へと資本をかりたてていきます。弱肉強食の激しい競争の強制法則に勝つて生き残るために、資本はたえず、搾取の強化と生産力の発展をめざさなければなりません。

こうして、機械制大工業という「独自の資本主義的生産様式は、それが一つの生産部門全体を征服してしまえば、ましてすべての決定的な生産諸部門を征服してしまえば、相対的剰余価値の生産のための単なる手段ではなくなる。それは、いまや、生産過程の一般的な、社会的に支配的な、形態となる」(③八七五ページ/同)。

機械制大工業が「すべての決定的な生産部門を征服してしまえば」、それはもはや「相対的剰余価値の生産のための単なる手段」が一般的になったということにとどまらず、その社会そのものを規定する形態となり、それが資本主義的生産様式とよばれるものだ、というわけです。

五、資本主義とは何か

生産様式とは何か

ここで、「独自の資本主義的生産様式」という概念が登場してきましたので、あらためて「独自の資本主義的生産様式」とは何かをみていくことにしましょう。

そのためには、まず「生産様式」とは何か明らかにされなければなりません。マルクスは、生産力を中心と

し、これに生産・分配諸関係を合わせた総体を「生産様式」とよび、それを社会の歴史的発展を区分する概念として使用しています。

すなわち、生産様式は「社会的生産諸力とその発展諸形態との与えられた一段階を、自己の歴史的條件として前提している」(⑬一五三六ページ／八八五ページ)のであり、「この独自の歴史的に規定された生産様式」(⑬一五三七ページ／同)に、「独自の、歴史的な」(同)生産諸関係と、この「生産諸関係と本質的に同一」(同)な分配諸関係が対応するものとしてとらえています。

したがって生産様式を規定するものは、歴史的に規定された「社会的生産諸力とその発展諸形態」ということになります。

独自の資本主義的生産様式

資本主義的生産様式も「他のすべての生産様式と同じように」(⑬一五三六ページ／八八五ページ)、「特殊な種類の、独自の歴史的規定性をもつ生産様式」(同)です。

マルクスは、先にみたように、第四章「絶対的および相対的剰余価値」において、機械制大工業のもたらす「社会的生産諸力」が「独自の資本主義的生産様式」をなすことを明らかにしました。

さらに、先取りすることになりますが、第三章「資本主義的蓄積の一般的法則」において、別の観点からこれを補足しています。

すなわち、「独自の資本主義的生産様式的前提をなす」(④一〇七四ページ／六五二ページ)のは、機械制大工業により「大規模な生産を担うことができる」「一定の資本蓄積」(同)です。反面、この独自の資本主義的生産様

式が、資本の蓄積を發展させることにもなりません。

「それゆえ、資本の蓄積にもなつて独自の資本主義的生産様式が發展し、また独自の資本主義的生産様式にもなつて資本の蓄積が發展する。これら両方の経済的要因は、それらが相互に与え合う刺激に複比例して資本の技術的構成における変動を生み出し、この変動によつて、可變的構成部分が不變的構成部分に比べてますます小さくなる」(④一〇七五ページ／六五三ページ)。

資本主義的生産様式は、機械制大工業のもとでの發達した生産力をもつと同時に、「資本の加速度的な蓄積」(同)により、資本の有機的構成を高めていくという点でも、「独自の歴史的に規定された」生産様式となっているのです。

資本主義とは何か

それでは、以上をふまえて、「独自の資本主義的生産様式」、簡単にいえば「資本主義」とは何か、という資本主義の本質をまとめてみることにしましょう。

一言でいえば、資本主義とは、剰余価値の生産を推進的動機とする生産様式の社会であり、とりわけ機械制大工業による生産が社会的に支配的な形態となったもつとで、資本が労働者への支配を完成し、より多くの剰余価値の獲得のために搾取の強化と機械設備の更新による生産力の發展を競い合い、資本はその有機的構成を高めつつ、生き残り競争を強制される弱肉強食の生産様式の社会であると、とりあえずその本質を規定することができるのではないでしょう。

以下第六篇、第七篇をつうじて、このような本質をもつた資本が、どのように「制限」を打ち破る価値増殖の

運動を展開し、その「当為」としての運動がいかなる社会的矛盾を生みだしていくのが考察されていきます。つまり資本主義の本質がその運動をつうじてどのように展開されるのが、「制限と当為の弁証法」をつうじて検討されていくのです。そしてこの運動をつうじて、「資本主義的私的所有の弔鐘が鳴る。収奪者が収奪される」(④一三〇六ページ／七九一ページ)ことが明らかにされ、第一部はその幕をとじるのです。